

第37回

わたしからの

人権メッセージ



2016年
特選作品集

堺市人権教育推進協議会

第三十七回

わたしからの人権メッセージ

特選作品集

「わたしからの人権メッセージ」発刊にあたって

堺市人権教育推進協議会では、人権を守り、平和で差別のない明るいまちづくりをめざして、市民主体の活動を進めています。その活動の一つが、本年度で第三十七回を迎える「わたしからの人権メッセージ」です。たくさんの方の市民の皆様が日常生活の中の人権問題に関心を持ち、自ら考え綴ることによって人権についての認識と理解を深め、さらに作品の共有を通して広く人権啓発につなげることを目的として実施しております。

今年度も、私たちの呼びかけに幅広い年齢層の皆様から、数多くのメッセージを寄せていただきました。作品を応募していただきました皆様には心からお礼を申し上げます。厳正なる審査の結果、優秀な作品二十点を特選作品とし、ここに、「わたしからの人権メッセージ」特選作品集として本冊子を発刊します。

人権が尊重され、平和で差別のない社会を創り出そうという応募された皆様の真つ直ぐな熱い想いと、真摯な姿勢には心を打たれるものがあります。

堺市では、「堺市平和と人権を尊重するまちづくり条例」を施行し、すべての人の人権が尊重され、安心して暮らすことのできる平和と人権尊重のまちづくりを積極的に推進しています。しかし

ながら残念なことに、同和地区の人々や外国人、女性、高齢者、障がい者、子ども、特定疾病者などに對する差別や偏見、虐待など心を痛める事象が起こっています。また、その手段にインターネットが利用されるなど、今なお多くの解決すべき人権課題が存在しています。世界では、今も多くの人々の尊い命が、戦争や民族紛争等により失われています。また、今年には熊本で地震が起こり、今なお避難所生活を余儀なくされるなど、不安な日々を送っている方が多くおられます。

すべての人々が尊厳ある生命を全うし、自分らしく安心して暮らすことのできる社会の実現は、人類普遍の願いです。

そのような社会を実現するには、私たち市民が差別事象・人権侵害事象等が発生している現実を直視し、それを自分自身の課題として受けとめ、日々の生活の中で人権を尊重する積極的な行動へと発展させていくことが大切です。

この作品集が一人でも多くの方々に愛読され、人権や平和、環境に対する認識を深める契機となり、私たちのまち堺から人権文化の花を咲かせる一助になることを期待しています。

二〇一六年十二月

堺市人権教育推進協議会

会長 金丸尚弘

もくじ

□ へいわつていいね	1
□ よしかわゆりさんのことを聞いて	3
□ いじめについて	5
□ みんなが手本の町に	7
□ たとえ障害者でも	9
□ ぼくがしえん学級に行く理由	13
□ 障がいと戦う弟	15
□ おじいちゃん	17
□ 僕が学んだ人権	19
□ 障がい者の人権	21

□ ゴミ削減へ向けて	23
□ 世界の人々の人権について	25
□ SNSを使うとき	27
□ 会話したい	29
□ 仲間と努力	33
□ 七月二十九日の夜をこえて	35
□ 家庭の中から	37
□ 父母からの教え	39
□ 継続することの大切さ	41
□ 個性を尊重できる世界に	43

※ご本人の希望により、お名前等が掲載されていない場合があります。

へいわっていいね

小学校二年

小西くるみ

せんそうにあつてる人は、どんなきもちかな？わたしはせんそうがないときに生まれたから、せんそうにあつてる人、しんでる人、どっちもかわいそうです。なにも食べられない人がいる、どうぶつがごろされるって、いやだな。わたしがおとなになつてから、せんそうがおきたらどうしたらいいのかな？ママがいない、パパがいない、ばあば、じいじ、ひいじいちゃん、ひいばあちゃん、ともだちみんなもいないって、どんなきもちかな？じつさいせんそうにあつた人は、今どんなきもちかな？

いつも生きてるじぶんがあたりまえじゃないんだよね。今でもくるしんでいる人がいるから、わたしは、そんな人がいないちきゆうがいいです。せんそうがなくなつて、だれもせんそうなんかしらなくなつて、へいわなちきゆうがいいです。いえがあることもあたりまえじゃないんだ。えがおが見られるのもあたりまえじゃない。せんそうがおきたことは、いやな、こわいことだけど、でも、じつさいおきるかもしれないから、知っておかないといけないんだな。



よしかわゆりさんのことを聞いて

小学校二年

松^{まつ}井^い耀^{よう}生^{せい}

ぼくのいえは、かまむろちゅうざいしよです。おとうさんは、ちゅうざいしよのけいさつかんです。

ちゅうざいしよの公かいに、よしかわゆりさんのポスターがはつてあります。一三年前の四年生の時からゆくえふめいになると教えてもらいました。

ぼくは、おとうさんとおかあさんともうとといっしよにごはんをたべたり、りょこうに行ったりしています。学校でべんきようしたり、ともだちとあそんだりしています。

よしかわゆりさんは、学校に行ったり、かぞくでおでかけしたりできません。おとうさんやおかあさんも、とてもかなしい気もちだと思えます。

ぼくが、よしかわゆりさんのポスターのことを聞いたとき、おとうさんから「みんなえがおで生きるけんりがあるんだよ。だれもかなしい思いをしないでいいよの中になるようにしようね。」と言われました。

ぼくも、ともだちにいやなことをしたり、人のわる口を言わないで、みんなえがお

で学校に行けるようにしたいです。

よしかわゆりさんも、早く大すきなおとうさんとおかあさんのところにかえれるといいなと思います。



いじめについて

小学校三年

小林 知徳

いじめってなんだろう。人をバカにする、ひどくけなす。ひどいことを言ったり、書いたりする。いじわるをいったりバカにしたり差別的なことを言う。こわがらせたり、いやな気分させる。持ちものをとったりこわしたりする。悪いうわさをたてる。むりに、なにかをやらせる。容姿や外見をばかにする。仲間はずれにする。遊びやゲームの仲間に入れない。無視する。おどす。いやがつているのに、異性をさわる。わざと問題をおこさせる。こんなこといじめじゃないと思ってるかもしれないが、これらは全部いじめです。

そして、なんどもくりかえされているならまちがいなく、いじめです。いじめにあうと学校にだっていきたくなくなる。いじめっ子のいそうな場所、グラウンドや公園なんかにも行くのがこわくなる。だれでも、どこかで、だれかに、いじめられたことがあると思います。いじめっ子だって、いじめられた経験はあるはずですよ。いじめられている子は、弱虫だと思われたくなくて、だれにも言わないでいることがあります。ほかにもいじめられている子がいることもわからないと思います。

いじめは、自分のせいではない。弱虫だからいじめる、なんてことは、けっしてあつてはならないことだと思います。これは、とても大切なことだから、わすれてはいけないことです。いじめは、自分が原因ではないのです。学校でも近所でも、だれもが安心して、安全に暮らす権利があるのです。

いじめには、いじめる人といじめられる人が存在します。いじめられた人は、その場でまぎろい落ちつかせてきつさとそこから逃げて、友達か大人のいる所に行き、大人にいじめられたことを話す方が良いと思います。いじめてる人は、もしかして、自分はだれかをいじめていないか考えてみる。だれかをいじめることで、自分は強いと思っはいけない。自分の行動を見なおして、心配事を信頼できる人に相談した方が良いと思います。

できることならいじめた人は、相手にあやまった方がいと思います。あやまるのがはずかしければ他の人のいないところであやまればいい。いじめた人は、すぐに信用をとりもどすことはできないけれど、時間をかけて相手に感じ良く接しよう。

もしいじめを目撃したら、大人に話して注意してもらおう。いじめている子にやめるように言う。いじめられた子に話しかけて、何かしてあげられる事はないか聞いてみる。

みんなでいじめられている子の友だちになって、サポートしてあげたらいいと思います。

みんなが手本の町に

小学校四年

河 かわ

上 かみ

琢 たく

磨 ま

ぼくの近所にしようがいを持つ、おじさんが住んでいます。そのおじさんは、高校生の時に交通事故にあい、重いしようがいのこつているそうです。おじいさんが数年前に亡くなり、八十才をすぎたおばあさんと二人でくらししています。毎日足をひきずりながら体をくねらせて、がんばってぼくの家の前を歩いて仕事に行っています。時間がかかって大変だけど、一生けん命、歩いている様子を見てぼくはすごいなあと、思います。

ぼくがもしも事故にあい重いしようがいのこつてしまったら、家にとじこもってしまいかもしれません。どうしてかというところ、みんなとちがうから、今までの友だちや近所の人にかげで何か自分のことを言われているのではないかと気になって、外に出たくないという気持ちになると思います。そしてぼくがおじさんと一しょに住むおばあさんだったら、しようがいのある息子を守るのには、自分だけだと思い、少しでも長生きしたいと思うと思います。

ぼくは、ぼくみたいな近くに住む人がやさしければ、おじさんも、おばあさんもうれしくて安心できると思います。そのためには、自分から元気にあいさつをして気軽にどんなことでも話せるかんきょうを作り、たのみごとをしやすと思うてもらえるように気をつけたり、最初にぼくがやさしくして、みんなの手本になったりすることが大切だと思います。そしてぼくは、この気持ちで周りのみんなに伝わって、いつかみんなのやさしさがどんどん広がるすてきな社会になってほしいです。ぼくはしようがいがあるかないかや、男らしいとか女らしいとか、みんなが同じではなくても、それをみんなが理かいしあつて、協力して生活できる町にしていきたいです。一つずつみんなが助け合い、みんなが楽しく生活できるように自分ができることをやっていきます。



たとえ障害者でも

小学校六年

小 お
細 ほそ
春 はる
睦 む

この「私からの人権メッセージ」のことを聞いて、初めに思いうかんだのは、『障害者』でした。足が動かない人や目が不自由な人、コミュニケーションがうまくとれない人など、さまざまな障害をもつ人がいます。

ぼくは、発音障害で知られる『吃音』です。

吃音は、発音の際、第一音が、容易に出ないという障害です。たとえば、こんにちはという時、こんにちはの「こ」の字が出ません。第一音目が出なくてぼくがこまっていると、友だちがバカにしたりする時があります。いろんなことをしゃべりたいのにしゃべれない、このくり返しでした。しかし、世の中には、ぼくとくらべものにならないくらい障害の重い人がいます。その中の一つに足がうごかない人がいます。この人たちは、好きで足が動かないんじゃないのに、友だちにからかわれている人がいます。しかも、からかわれなくても、電車に乗ったら他の人に変な目で見られている人がいます。これにはぼくもいけないがあります。ある日電車で友だちとしゃべっていて、吃音で言葉がつかまっている時に友だちは、ぼくの障害を知っていたので、なにも言いませんでしたが、ふと横を見ると、

大人がこちらをじつと見ていたのです。ぼくは何度も、吃音さえなければと思いました。

しかし、障害者には、すばらしい一面もあります。からかわれている人の気持ちが分かる人が多いのです。

今ぼくが一番目を向けているのは、『車いすバスケット』です。このスポーツは、一見車いすなので弱そうですが、車いすバスケットは、とても激しいのです。車いすですが、すごいスピードでげきとつし、ふつとばされながらもシュートを決める様子は障害者という事わすれてしまいたいそうです。しかもいすにすわって、足の力を使わずにシュートを決めるのはとても自分にはできません。

また、障害者のスポーツにブラインドサッカーがあります。このサッカーは、目が見えない人のサッカーです。ボールには、すぐみたいな物が入っています。そしてゴールの後ろにボールの位置などを教える人がいます。このサッカーは、ぼくたちがすると、なにも見えないので、とてもこわいです。しかし、選手は、まるでボールが見えているかのよう

に、ボールをさわっているのです。

この様に障害者は勇ましく生きています。ぼくも吃音でやんでいます。吃音の有名人を思い出します。たとえば、はいゆうのブルース・ウィルスやゴルフ選手のタイガー・ウッズ、元NBA選手のボブ・ラブなどがいます。「ぼくはこんな有名人と同じなのだ」そう思うと、とてもほこらしくなってきました。



障害者の障害は障害ではなく世界に一つだけの個性と 생각합니다。そして日々精進していきたいです。

ぼくがしえん学級に行く理由

ぼくはしえん学級にいつてます。

ぼくはかんじがにがてやから、しえん学級に行かなあかんのやとおもつてた。

でも、ママが「あなたがパニックをおこして、ケガしたり一人でこまつてたらあかんから、たすけてもらうために、しえん学級へも行くんやで。」と、おしえてくれた。

小学校へ入ってから、ずっと、なんでつておもつてん。先生ついてくるなあつて。

ぼくがいやなことにあつて、おどろぐばこひっくりかえしたら、先生もきてくれるし、おともだちも、みんなでかたづけけるのを、てつだつてくれるねん。

ぼくは、人にやさしくするのはあたりまえとおもつてたから、みんな、あたりまえをしてくれてるとおもつてたけど。

ぼくはことしになつてから、一人で学校からおうちへかえることになつてん。

今までは、じいちゃんやママがおむかえにきてて、ぼくのことしんぱいやからとおもつてたけど、ぼくが、どこかへいってしまったりけがしたり、おともだちとけんかしたりしないようにしててんて。

ことしになつてから、学校がおわつたら、たまに、デイサービスへ行つてます。

デイサービスは、おべんきょうするところとおもつていたけど、パパとママはぼくが、「たくさんのおともだちとあそべるように。」つて入れてくれてんて。

デイサービスには、ぼくと同じはつたつしょうがいのおともだちがいて、あそんだり、しゆくだいたり、けんかになつたり、ほけんしつのようなところへいつてみたりしてん。

ぼくは学校や、デイサービスへ行くのがたのしい。

夏休みは長い。早く学校へ行きたい。

おべんきょうは、にがてなこともあるけど、しらんことを、たくさんおしえてもらえてうれしい。

先生も、ぼくのはなしをきいてくれてうれしい。

おともだちと、サッカーしたり、ドッジしたり、ぼくは、はしるのおそいけど、たのしい。

もつと、みんなと同じように、おべんきょうしたり、あそんだりして、パニックもおこさんように、こころのつよいぼくになりたいです。

それで、ぼくはこまつてる人をたすけるおとなになります。



障がいと戦う弟

中学校一年

私が、小学一年生の三学期に弟が生まれました。元気な弟で、ミルクもよくのみスクスクと育っていきました。生後四ヶ月半の時のことです。

突然病気になる入院をしました。お母さんもずっと付きそいで家に帰って来ませんでした。健康で元気に生まれてきた弟が障がい者になってしまい、最初はとも辛かったです。一才になっても一人で座れない、自分でご飯も食べられない、歩けない。

私も辛いけど、両親も辛いと思います。

弟に会いたくても会えないこと、面会に行っても会えないって本当にこんなに辛いことはありませんでした。

治りようが終わり退院してきた弟に会えた時は、とてもうれしかったです。

その後も、入・退院のくり返しが続きました。

私が友達と遊びたくても行けなかったこと、その時は「何で遊ばれへん!」と思ったことも度々ありました。学校から帰った後、弟の面どうを見たり、お風呂に入れるお手伝い

をしたり、母の手助けをしてあげようと、思いました。

知的障がいと身体不自由な弟は、笑顔がとても可愛いく、名前を呼ぶと満面な笑みで私の方を見てくれます。

今では、弟のお風呂も私が入れることも多くなり、ご飯を食べさせてあげることでも楽しくて、仕方ありません。

言葉は、「マンマ」しか言えないけど、その「マンマ」が、水分のことだったり、ご飯のことだったり区別が分かるようになりました。一年前から少しずつ歩けるようになりました。私が障がい者の弟をもって思ったことは、障がい者であっても、差別をしてはいけない、私達と同じで一日一日を一生けん命生きて、一生けん命リハビリをして、頑張っていることに、逆に色んなことを教えてもらっているような気がします。

友達には経験できない事を日々弟に経験させてもらっている私は、とても幸せ者だと感じます。



おじいちゃん

中学校一年

渡

邊

怜

奈

私は幼稚園の年長さんの時にお父さんの転勤で、大阪に引越してきました。大阪には、お父さんの祖父母が近くに住んでいました。私は、近くに、おじいちゃんとおばあちゃんがいなくて、そして、友達がたくさんできてとてもうれしかったです。

でも、それも二年間で終わってしまいました。理由はおじいちゃんがすい臓ガンでなくなってしまったからです。おじいちゃんは、家の中の大工仕事が得意で大阪に来たころは、家の中の床をすべておじいちゃんとおばあちゃん、張りかえていました。まず、床をはがし、板と釘を買ってきて、ホッチキスのような機械で、新しい板をとめ、張りかえしました。そして、二階にあったトイレも新しい便器を買ってきて、そなえつけました。扉も新しいものにし、全てバリアフリーに作りかえてしまいました。おじいちゃんは、朝早く起きて、設計を考えるのが大好きで、これが生きがいでした。しかし、その後おじいちゃんが、「腹中がキューツと痛い。背中の方も痛い。」と言うようになりました。病院ぎらいのおじいちゃんもしかたなく近くの病院に行くことにしました。すると、病院から、「大きな病院で診てもらって下さい。」と紹介状を渡され、とうとうすい臓ガンが見つかり、闘病生活が始まりました。しかし、そんな事にはめげず、最初のころは、「思い出に大好きな海外旅行に行きたい。まだ、おじいちゃんの仕事をきちんとできる人がいないので仕事に行かないといけない。」

などと言って電車で片道一時間半もかかる会社に週三、四回行っていました。この時、私は、人間には、目標や人から頼りにされるといいう事が、生きがいになるものだと、再び思いました。発見から十ヶ月がたつころは、私たちが、週末に夕ご飯を食べに行くと、ベッドからおきて来てくれて、

「ちよつとビールでも飲もうか!」

と自分を元氣付けるかのように、グラスの半分位のビールを飲んでいました。おばあちゃんに聞くと、

「普段は飲めないんやけどね。」

と言っていました。私たちが大阪に引越して来て本当によかったと、その時思いました。しかし、抗ガン剤治療がうまくいかず、手術もできない状態になり、だんだんと力がなくなってしまうました。そして、発見から一年がたつころ、おじいちゃんは亡くなりました。その後、私達はお父さんの転勤で、岡山に三年間行き、そして、また大阪に帰って来ました。今は、おじいちゃんはいませんが家の中にはおじいちゃんを作つて残してくれたものばかりです。まるで、今でもおじいちゃんが生きているかのようにおじいちゃんの思い出がいっぱいあります。

僕が学んだ人権

中学校二年

福ふく泉いずみ典のり明あき

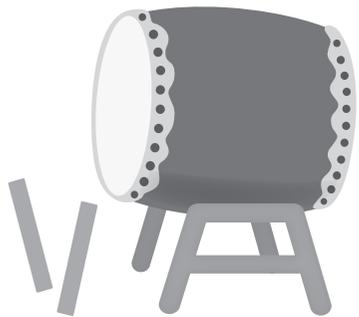
僕は、学校で「被差別部落」について学びました。「被差別部落」は、生まれ育った場所だけで差別を受けるとてもひどいものです。そして僕たちの学校に被差別部落で生まれ育った人達で結成された太鼓集団の演奏がありました。演奏には、迫力があり、普段聞けない太鼓を聞かせてもらえてとても良かったです。そして何よりもその演奏には、僕たちの心の中にも伝わってくる『気持ち』がありました。差別は絶対にダメというすごい強い思い、そして差別に負けずに演奏する姿、それはとてもかっこよく力強かったです。

もう一つこの学習で聞いた話があります。

それは「野球」の話です。話してくれた方の故郷はとても野球のさかんな所であり、野球チームの監督をしていたそうです。しかし、その野球チームは、「被差別部落」の地区のチームであったことからたたくさんのひどい差別を受けたそうです。場所をあたえてもらえなかったり、他のチームが試合を組んでくれないなどすごく悲惨な差別でした。ぼくは小学校からずっと野球を続けています。だからこの話はすごく共感できる話もありました。そしてこの話を聞いて思ったことそれは、ぼくたちがいつもあたりまえのように行っている

試合などはあたりまえにできることではないということです。差別と闘っていくことは、すごく大変ということを改めて感じました。

僕が、最後に思ったこと、それは、差別は絶対にダメということです。これはあたりまえのことかもしれませんが。しかし、そのあたりまえのことでも改めて考える必要があると思います。そして、人が嫌がることや傷つくこと、どんな小さなことでも差別につながることをなくし、僕たち若い世代が差別のない社会をつくっていかれたらと思います。



障がい者の人権

中学校二年

沖野有彩おきのあり

バリアフリー化は進んできていると思う。例えば、主な駅にエレベーターがついてきている。大きなお店には、必ず車いすマークの駐車スペースが入口付近にある。大きな施設や観光名所では、障がい者手帳を持つていれば割引になる。今は、障がいのある人もどんどん外に出やすくなってきている。

ところで、なぜ私がバリアフリーというタイトルを選んだのか？私は、この作文を書くにあたって改めて、バリアフリーの意味について辞書で調べてみた。バリアフリーとは、「高齢者や障がい者が社会生活を送る上で障壁となるものを取り除くこと。現在では社会制度、情報の提供、人々の意識を含めた様々な障壁を取り除くこと。」となっている。

私は、生まれつきの脳性まひで手足が不自由なので、毎日電動車いすで通学している。支援学級の先生や周りの友達のおかげで私の希望する地域の中学校に通えているのだ。障がいを持つている私の目から見て、本当の「バリアフリー」のことを考えてみた。

さて、私の立場から考えると、まだ少しバリアフリーになっていない所があると思う。例えば、通学には、踏切のある道が近いのだが、その踏切の幅は狭く、通学時間には人と車で

いっぱいになり危険なので、回り道をして地下道を通っている。駅に行くまでの道路でも歩道と車道の間で段差があり、時にはその段差が高いことがある。駅では、電車とホームの間が広くて怖いところがある。私が今までに訪れた施設や観光地では、道がでこぼこしているところがあり、見栄えは良くても、車いすの人や高齢者にとっては動きづらい環境のところもあった。

私のような障がい者や、高齢者などバリアフリーを必要としている人は、たくさんいる。これまで挙げたように、全体的には、ハード面のバリアフリー化は、進んできている。

そして、私が今強く思っているのは、ソフト面である「心のバリアフリー」も必要だということである。例えば、私が、車いすで何かをしようと、周りから見られることが多い。すると、周りから注目されて目立っているように感じる。私はその周りの視線が苦手だ。それに加えて、私が一所懸命何かをしようと頑張っているようにも、周りの人にとっては当たり前に出てくる事は、私も当たり前に出てくることと思われているようだ。顔を上げて相手の顔を見て話すことや、スムーズにコミュニケーションをとることなど。私は、こうしないといけないと思えば思うほど、頑張れば頑張るほど思うように出来なくなってしまう。だから、外見だけではなく、中身の性格や本当に苦手なことにも目を向けて理解してほしいと思う。これは、私という一人の人間の個性である。きつと、私だけではなく、他の障がいのある人も同じように思っていると思う。

「心のバリアフリー」とは、偏見をなくし、一人一人の個性を認める周囲の温かい目だと思ふ。

ゴミ削減へ向けて

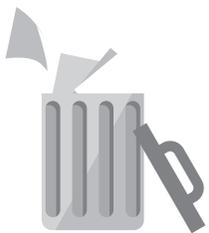
中学校二年

ゴミの削減で世界は救われる。少し大げさに思うかもしれないが、この「ゴミ問題」は、現在、世界中で問題視されている地球温暖化にも直結する問題なのである。そして、驚くことに、日本はゴミの焼却数で、世界で一番なのだ。私は、このことにショックを受けた。なぜなら、日本の遊園地やショッピングモール、そして町並みはきれいだからだ。しかし、ゴミの焼却数が世界で一番ということは、まぎれもない事実である。私は日本国民の一人として、ゴミを少しずつ減らしていかなければならないと考える。

まず、ゴミをたくさん燃やすと、自然環境や、私達人間の健康にも影響が出てくる。これは、ゴミを燃やすことで発生する二酸化炭素、そして有害なダイオキシンという物質によるものである。二酸化炭素が排出されるということは、ゴミ問題が地球温暖化の手助けをしていると言っても過言ではない。また、土に埋めたゴミからは有害な物質が流れ出し、土や川などを汚染することもあるのだ。このことは生物にも悪い影響が出る。このようなことを防ぐために、ヨーロッパでは、様々な取り組みを行っている。一つ目は、使い捨て容器に高額な税金をかけることだ。このことにより、むだなゴミが減少する。二つ目

は、ゴミの完全分別だ。そして三つ目は、生ゴミの堆肥化である。ヨーロッパでは環境問題に対する国民の意識が高いそうだ。その高い意識が、ゴミの完全分別などの努力に繋がっているのだと思う。ゴミ削減には、努力することと、多くの人の協力が必要不可欠なのである。

ゴミを燃やすと、環境や様々な生物に悪影響が出るため、ゴミ削減に向けて、出来ることからコツコツと取り組んでいきたいと思う。例えば、いらぬチラシで、ゴミ入れを作ったり、着られなくなった服をつなぎ合わせて、小物を作ったりと、私達中学生に出来ることは、たくさんあるのである。ゴミの価値を変えることで、資源のむだ使いは減るのだ。他にも、電子書籍、エコバッグの利用などもある。ゴミ削減に繋がるヒントは、身近な所に転がっているのだ。そのヒントから一つでもゴミを少なくしていくことが出来たら、少しずつでもゴミは減っていくと思う。これからは、使えるものは有効に活用し、出来るだけゴミを少なくしていけるように頑張っていきたい。未来の私達が、ゴミ問題によって今より進化した地球温暖化に苦しめられるようになるのかどうかは、今の私達にかかっているのである。だから、未来の私達のためにも、今の私達の努力は必要なものなのである。ゴミ問題は、これからの地球に関わる重大な問題である。



世界の人々の人権について

中学校三年

山

中

千緒里

日本時間の八月六日、四年に一度のオリンピックが開催されました。その開会式で、色々な国の選手達が行進している中、私は「難民選手団」という名前で出場している選手を見て、「なぜ国の名前が出場していないのだろう。」「そもそも、難民とは何だろう。」と、様々な疑問が湧いてきたので、調べてみました。

まず、難民とは、武力での争いが起こって、そこに住んでいると命の危険があるので逃げなくてはならない人々、災害などで住む場所がなくなった人々、また、宗教がちがうからといって迫害されて国を出なければならぬ人々などのことをさします。オリンピックで見た「難民選手団」の人達は、こうした色々な理由で祖国をはなれ、「難民選手団」として出場していたのです。

次に、難民選手団の選手にはどのような人がいるのかも調べてみました。選手達のほとんどが紛争によって逃れてきた人達でした。陸上に出場したある選手は、

「競技に集中する自由を与えてもらったことに感謝しています。」

とコメントしていました。私は、日本では当たり前前のことが、他の国では当たり前ではな

いということに驚きました。また、

「紛争のせいで練習どころか、普通の生活もままならない状態の人がたくさんいるのか。紛争がなくなる日はないのか?」

と思いました。紛争の多くは宗教対立によるものです。そして、その紛争の犠牲になるのは兵士だけでなく、子どもや女性もたくさんいます。そして現在、世界には約四千四百万人の人が故郷を追われているそうです。しかし、違う国に逃げても、なかなか受け入れてもらえないことがあるそうです。

昨日まで平和にくらしていたのに突然紛争によって幸せが奪われたら、そして、紛争で家族、友達と二度と会えなくなったら・・・、そんな体験をしたことがない私には、なかなかイメージできないですが、今もどこかで起こっています。

紛争は、たくさんの人の命や幸せを奪います。紛争で笑顔になる人はだれもいないとは思いますが、紛争は今すぐ無くすことは難しいです。でも、オリンピックのように、紛争の事を考えずにすごせる時間は作れると思います。そして、いつか「難民選手団」ではなく、自分の国の国旗を掲げてみんなが出場できる世界になればいいなと思います。



SNSを使うとき

中学校三年

東尾風花 ひがし お ふう か

例えば、LINE。LINEは今、私の身の周りでも多くの人が利用している。LINEでやりとりをするとき、私たちは互いの顔が見えない。直接会わずに話ができるのは便利だが、使い方によっては、相手が「見えない」ということがとても怖いことを、私は知っている。

私は中学一年生のときに、部活を辞めた。ある日突然、友達から無視されるようになったのだ。お弁当を一人で食べたつもりもした。私が部活に行かなくなった日、その友達からLINEが来た。「なあ、今日部活来てないけど辞めるん？なあ。」怖い口調のたくさんのメッセージだった。彼女はそんな言葉なんか使わないのに。今はこうして体験談として話せるが、あの頃の私にとってはとても辛かった。日々冷静でいられなかった。

両親は私の悩みなんてわかってくれないだろう、と思っただけでなかなか相談できなかったが、勇気を出して話してみた。返ってきたのは予想していない返事だった。「そうだったの。辞めてもいいんだよ。」今の時代も大変だよ。辛かったね。」私は、人から久しぶりに優しい言葉をかけてもらった気がして、ほっとして涙が止まらなかった。本当に救われた。

私は彼女と話さなければならぬと思ひ、彼女に電話で話をしようと思ひた。電話で、私の何気ない一言が、彼女を嫌な気分させていることが初めてわかった。彼女はこんなことを言っていた。「相手の顔が見えなかったから、ついカッとなつて思つてもないことまで言つてしまった。本当にごめんね。」私たちは互いに泣きながら謝りあい、最終的に分かり合えたが、ずっと傷ついたのである。

相手の顔が見えないと、「相手の立場に立つて気持ちを考える」ということが少し難しくなるかもしれない。感情に任せて送信してしまつていないか？本当に伝えたいことはそれか？何かを送信するとき、必ず考えなければならぬ。私は嫌な気持ちを経験したからこそ、自分の見えないうちで絶対に人を傷つけない。一人一人がSNSでの加害者にならぬよう、意識すべきではないだろうか。また、私はSNSに惑わされない強い心を持ちたいと思う。

SNSは自分だけの世界だから、一人で悩んでいる人がいるかもしれない。私はその人たちに、「心配しなくて大丈夫だよ。」と言つてあげたい。「自分は必要とされてないんじゃないか」、そう思っている人がいたら、「そんなことない。」とはつきり言つてあげたい。私は、誰かが困つてるとき、その人の話を聞いて、声をかけてあげられる人になりたい。それで、その人の心が少しでも楽になつたり、明るくなつたりできるのならとても嬉しい。

会話したい

支援学校高等部二年

高田啓太

僕はコミュニケーションが苦手だ。でも、友達とスムーズに話をしたい。

僕は耳が聞こえにくいのが、一般中学校に進学した。入学式の時、担任の先生からクラスメートに僕の耳の聞こえにくさについて、説明をしていただいた。初めて会う人がたくさぬいる中で、話してみたいなと思うことはたびたびあったが、話してみようとすると、なぜだか体が動かなかった。もし、話しかけてみて、僕の言っていることが伝わらなかったらどうしよう。僕が聞こえにくいことで何度も聞き返したらどうしよう。迷惑をかけてしまうのではないかと不安だらけで、なかなか自分から話しかけることができなかった。

部活動でも、必要最低限の話なら、聞きなれている言葉がたくさん出てくるので、なんとなく分かるし、話すことはできたが、たわいなしおしゃべりがどうしてもできなかった。

学年でただ一人、聞こえにくい僕は、耳のことをみんなにもつと知ってもらいたいが、そのことでどう思われるのか常に不安だった。

そんなある日、次の授業の教室を度忘れしてしまい、クラスメートに、

「次の授業、どこやったけ？」

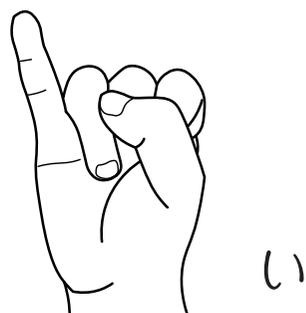
と聞くと、

「ああ、理科室〜。」

と聞こえた。はつきりとは分からなかったが、何回も聞くのも申し訳ないと思い、「多分理科室『1』かな。」と勝手に解釈して理科室『1』に向かった。すると、そこには誰もいなかった。慌てて理科室『2』に向かってみた。そこにはクラスメートがいたので、とても安心した。初めて、聞こえにくい自分のことを恥ずかしいと思った。『1』か『2』の違いだけで、こんなにも気持ち揺れるものなのかと実感した瞬間であった。

このように僕の中での大事件以来、「分からない。」と感じると、すぐに先生に聞きに行くようにした。クラスメートに聞く手段もあったと思うが、相手が何を言っているかわからなかったら、何度も繰り返してくれるようお願いをしようかもしれない。そこで時間がかかって、迷惑をかけてしまうのかもしれない。そして、「聞こえにくい僕のことをどう思うのだろうか。」と、ますます不安が増していった。そうして、三年間、おしゃべりを楽しむことなく卒業してしまった。

今は、聴覚高等支援学校に入学し、手話を獲得して、聞こえない・聞こえにくい仲間とともにたわいなし話を楽しめるようになった。中学校の時は、聞こえている部分と聞こえていない部分が相まって、「なんとなくこう言っているな。」とふわふわした感じでしたか分



からなかつた内容が、今ではほぼ分かるようになった。内容が分かるだけでもこんなに差が出てくるものなのだ。手話を使うことで、自分に自信が持てたような気がする。まだまだ友達と話すことが苦手なので、たくさんたくさんおしゃべりをして、コミュニケーションをとることの楽しさを追求していきたい。

仲間と努力

支援学校高等部二年

小山龍馬

僕は耳が聞こえない。特別な人間なのだろうか。

小学校でサッカー部に所属していたので、もっとうまくなりたいと思い、中学校でもサッカー部に入部した。入部したばかりの頃、違う小学校からやってきた同級生に、

「耳が聞こえないからサッカーはできない。」と決めつけられたかのように言われた。耳が聞こえないことをバカにしているような言い方だったので、とてもショックを受けた。

しかし、これぐらいなの！とへこたれずに、毎日毎日練習に行った。

練習の時、キャプテンの指示が聞こえず、相手のマークをすることを知らないまま、プレーを続けていたら、点を入れられてしまいキャプテンに、

「お前何してんねん！マークしろと言ったやろ！」

と怒られ、そこで初めて指示をされていたんだと気付いた。言われた時は、顔から火が出るぐらい恥ずかしかつたが、この経験が無駄にしたくない。その一心で周りを見てプレーをすることを心がけた。それでも、指示に気付かないことが多く、どうしようと悩んでいた。そんな時、チームメイトから、

「なあ、『あ』って、どうやって指文字でやんの？」

と聞かれた。最初は、へ？と呆然としたが、嬉しいという感情が一気に押し寄せてきた。

そうして、チームメイトが僕の「耳」の代わりとなってくれた。耳が聞こえなくてもサッカーはできる！と、毎日毎日練習に行き、チームメイトの期待に応えられるよう、誰よりも努力し、雨でも雪でもグラランドに出て練習し、泥まみれになつても諦めずにボールとチームメイトを見つめながら、練習に励んだ。練習を積んだ結果、監督に、

「お前はAチームに行け。」

と言われ、とても嬉しくBチームで、

「やったぞ！」

と思わず叫んだ。

耳が聞こえなくても、努力すれば必ず目標は達成できる。僕はレギュラーになりたいという小さい目標だったが、それでも達成できた時の喜びは何よりも勝る。特別な人でも何でもない、諦めなかったただの人間だ。

高校に進学した今も、サッカー部に所属している。サッカーをこれからも続けて、子どもたちに耳が聞こえなくても、サッカーはできると教えてやりたい。サッカーを通して、壁にぶつかった子どもには、少しでも力になれるように、昔、僕にもこんなことがあったよと話して、寄り添うことのできる大人になりたい。

七月二十九日の夜をこえて

成人(中学校夜間学級三年)

由良勝子

一九四五年、私は小学校二年生でした。太平洋戦争の真つ最中でしたので、母はいつも警戒警報が発令されると、妹を背負って、解除されるまでラジオの前から離れませんでした。しかし、七月二十九日は空襲警報発令と同時に、家の近くに焼夷弾が落とされました。寝ていた私や弟はたたき起こされ、母に連れられて火の中を逃げました。母の実家が新在家の御旅所の前にありました。そこに父が傷痍軍人になったときにもらった勲章や大切な書類を預けていたので、取りに行きました。電気が消えて真つ暗な中から、預けていたカバンと手近にあつた夏布団を一枚、持ち出して途方にくれていました。そのとき、消防団の人が「そんな所にいたら焼け死ぬぞ」と言つて、御旅所の防空壕を教えてくださいました。そこも満員でしたが、何とか入れてもらいました。持ち出した夏布団を頭からかぶつていますが、ときどき爆風のために竜巻が起こり、布団が吸い取られそうになりました。やがて敵の爆撃機が帰り、夜が明けてきました。外に出ると、あたり一面焼け野原で煙が上がっていました。道行く人も火傷をして、泣きながら歩いていました。みんな市立女学校に集まっているぞという声が聞こえてきて、私たちもそこへ向かうことにしました。

たどり着いたときには、無事であつたことを喜び合いました。しかし、ここで会うことができなかった人もいました。お向かいに住んでいたご家族です。いつもなら一緒に逃げるのですが、この日に限つて、自宅の防空壕に入られ、家と共にご家族全員が焼け死なれたそうです。奥さんは九か月の身重で、ご遺体からは赤ちゃんが半分出ていたそうです。こんな愚かで恐ろしい戦争は絶対してはいけません。

焼け出された後の家探しも大変でした。知り合いの家の一間を借りて、しばらくは居候生活をしました。たまたま、近くの方が引っ越しをされて、空いた家が借りられることになりましたが、畳もないような所でした、床の上に、父が、むしろを探してきて敷きました。その上に寝るのですが、服にわら屑がいっぱいつくので、取るのに一苦労しました。八月十五日、戦争が終わつたとラジオで知らされました。母は、もう少し戦争が早く終わっていたら、大空襲で起こつた悲惨なできごともしらなかつたのにと、がっかりしていました。その後、父が勤めていた造船所は暇になり、生活が大変になりました。

私は小学校六年生で働きに出ました。

現在、私は勉強できなかった日々を取り戻すため、殿馬場中学校夜間学級に通っています。家族で逃げまどつたあの七月二十九日が今年もやって来ました。しかし、私は夜空を見上げながら、足も軽く自転車のペダルをこいで、学校へ向かいます。爆弾ではなく星が降り注ぐ、この幸せがいつまでも続くことを願いながら。

家庭の中から

成人

大谷

絵里奈

「パパ偉いなあ。」

我が家は、共働きです。母である私が一番先に家を出て、朝食の片付けと子どもを保育園に送り届けるのは夫です。その話をする毎回のよう言われるのが、冒頭の言葉です。

日本では、近年、「女性活躍」が掲げられ共働き夫婦は増加しています。しかし、社会に出て働く女性が増えても、子育てや家事は当然のように女性の仕事と認識されているように感じます。当事者のママ達でさえ、自分の役割だと思っっているから「手伝ってくれていいなあ。」と言うのです。

そういう私も、二年前までは専業主婦でした。第一子の出産時に、何の疑問も持たず会社を辞め、子育てと家事を全て担っていました。仕事で毎日終電帰りの父と専業主婦の母を持つ家庭で育った私にとって、これは当然のことでした。再就職の条件も、夫に頼らず生活に支障が出ないことと決めていました。

しかし、三人の子育てと家事と仕事をこなしていたある日、急性の眩暈症めまいになってしまいました。それからです。夫が「家事を教えてほしい」と言い出し、頼ることに抵抗のあつた私も

少しずつ任せられるようになりました。そして、現在の協力体制が定着しました。

こうなってみると、家事や育児を夫婦で担うのは自然なことだと感じています。家事には力仕事もありますし、夫婦の宝である子どもを母親が一人で育てることに疑問を感じています。

もちろん、子どもの成長を一番近くで見守りたい想いはありますし、長時間労働が多く、男性中心の社会では、頼りたくても頼れない実情があると思います。しかし、これを改善していくことができれば、夫婦の結びつき・家族の結びつきも強くなるのではないのでしょうか。

今、小学校では、出席番号が男女混合になり、家庭科の授業では男女一緒に味噌汁を作り、ミシンを使うようです。また、女子の学年代表も珍しくなく、男女の役割を決めた教育ではなくなっています。

また、看護婦さんから看護師さんに、保育士さんから保育士さんに名称が変わり、職業における潜在的な男女差別も解消されてきています。

このような教育が浸透し、社会が変わることで、子どもたちが大人になる頃には、男女区別なく生活を共に築き、好きな仕事を選べ、活躍できる社会になっていることを願っています。

男だから、女だから、母だからという理由で制限されることなく、ひとりの個人として認められ、誰もが輝ける社会になることを。

まずは、家庭の中から。我が家では、娘にも息子にも家事の役割分担があり、当然のこととして担っています。

父母からの教え

成人 中なか信のぶ晶あき子こ

私の両親は四年前に、父は癌で母は心不全で続けて亡くなりました。姉と遺品整理をしている時に、二人の日記を見つけました。悪いと思いつつ読んでみると、そこには、戦後苦勞した事や二人の青春時代、結婚や子育て、私達への思いが綴られていました。真つ直ぐに生きた二人の人生が、まるで映画でも見てるかのように、心の中に入ってきました。若き時代、貧しい時にも、父は俳句、母は茶道や華道に親しみ、それを趣味にしていました。

二人が亡くなる十年程前に、母が認知症になってからは、父がずっと介護や家事一切を切りもりしていました。老老介護というものです。私たちも、何かあればすぐ駆付けるようにしていました。父の苦勞は並大抵のものではなかったと思います。母の認知が進むごとに、どんどん状況は厳しくなっていました。

しかし、どんなに大変な時でも、母をデイサービスに送り出した後、家事の合間に俳句を作る。病で入院した時も、母の事を心配しながらも気分を変えるように俳句を作る。そのスタイルは、まさに死の直前まで続きました。そのエネルギーは、一体どこから湧いてくるのか不思議でした。

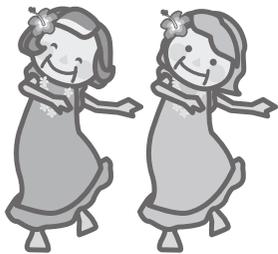
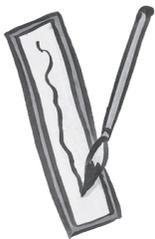
以前私に、「何か打ちこめる物があれば、人生が楽しく厚みが出るよ。出来ればあなたもそういう物を持ちなさい。」と話してくれた事があります。父の残した俳句の数々を整理しながら、苦しい時もいつも笑顔でいた父と、「ありがとう」「あなたが好きよ」と、いつもきれいな言葉をかけてくれた母のやさしい顔が思い出されました。

今私は、自由の泉大学に通っています。

そこでは環境問題や教育・福祉など様々な事を学ばせてもらっています。そしてそこには、たくさん元気な先輩方が活躍しておられます。

私もずっとしたかった絵画や英会話の勉強を始め、毎日の暮らしがワクワクするよう
な、前向きなものになりました。

天国から父母が、しっかりと自分の人生を歩きなさいと、教えてくれているような気がします。



継続することの大切さ

成人 石田翔己

私の祖父は晩年、喉頭がんを発症し声帯を摘出することになり失声しました。失声してからは電気式人口喉頭という器具を使用して話すようになりました。

当初、祖父が電気式人口喉頭を使用すると、家族は祖父が発する言葉に耳を傾け、内容を理解するように努め、祖父とのコミュニケーションを図っていました。祖父もまた少しでも聞きやすいようにと努力しているようでした。

しかし、祖父が器具になれてないこともあり、音が聞き取りにくく、聞き直すことが多くありました。すると、祖父は自分の意思が伝わらないことに苛立ち、さらに、器具を使用するのが面倒なこともあり、次第に家族と話す機会が少なくなりました。家族もまた祖父が話さないという理由で、祖父に対して話しかけることが少なくなりました。

当時の私は、祖父と話す努力はしたし、祖父が話す意思がないなら話さなくていいやと考えていました。次第に祖父と私の会話は挨拶程度になっていました。

数年後に、祖父は認知症だと診断されました。医者からは会話をしなくなったことも発症した要因の一つだと指摘されました。このことを聞いたとき、祖父とのコミュニケーション

ヨンが以前のように十分に取れていなかったことに気付きました。なぜ祖父に合わせて会話をしなかったのだろうかと後悔しました。これは、話せない祖父を邪魔者扱いする人権侵害だと思いました。

祖父が失声してから認知症を発症するまでの体験を通じて私が学んだことは、相手の立場に合わせた行動を一時的にだけでなく、継続して行うことが大切だということです。

私と私の家族は、祖父が失声した直後は祖父に合わせて会話することができていました。しかし、それを継続して行うことができなかったのです。祖父は単純に器具を使うことを嫌っただけでなく、私たちに迷惑をかけたくないという思いで、自分の意思を伝えるようになったのだと思います。私がやるべきことは、「会話する」という簡単なものでした。祖父がうまく話せるようになるまで、継続して祖父のペースに合わせるだけだったのです。

現在、私は足を悪くした祖母に対して、歩くペースを合わせ、手を貸すというところを行っています。簡単なことですが継続して行っていきたいと思います。祖母が私に合わせるのではなく私が合わせることで、祖母に気を使わせないようにしています。

日常生活の中では様々なハンディキャップを持った人と接する機会があります。誰に対しても「手を貸す」「道を譲る」など、簡単なことはできると思います。私は簡単なことを継続して行うことで、「人権」を守りたいと思います。

個性を尊重できる世界に

成人

私の息子は小さい時から電車や戦隊物などに興味がなく、いつも二歳上の姉のおもちゃで遊び、少女戦士や女の子のファッション物のテレビを見ていました。幼稚園に入る頃、ハンカチや巾着などを揃える時には、少し可愛い色柄の性別の関係なさそうなキャラクターの物を準備しましたが、意思の強くなって来る年中の頃には、姉の靴下やハンカチを持つて登園するようになりました。小学生になる頃には、少しキャッチボールやボール蹴りが出来た方がいいと思い、一緒に練習しましたが、好きになることはありませんでした。私や近所に住む親戚は、「友達にからかわれるのを覚悟して、心を強く持つて好きな事をすれば良い。」と思い育てていました。

息子が小学生になってしばらくして、近所の同級生の母親に、「ママえらいねえ。私は息子があんなんやつたら我慢できへんわあ。」と言われたり、主人の母から、

「男のクセにちまちまとそんな遊びをしておつてから・・・」
と、怒られたり嘆かれたりしました。私は、息子の言動が周囲に理解され辛い事は承知していましたが、息子の趣味や性格を直したい、または、こんな息子が恥ずかしいと思つた

事は一度もありませんでした。ですが、この頃から息子は近所の同級生の男の子達から仲間外れにされるようになりました。私はどうしたら良いのか悩みましたが、息子との時間を多く作り、幼稚園の時の友達や習い事で仲良くなった友達との時間を多く取り、学校以外にもたくさんさんの世界があり、自分を受け入れてくれる場所があるので、悪い事をしていく訳ではないので堂々としていて良いのだと教えました。

その一方で、近所の友達とも仲良くなれないかと思いましたが、彼らの親が息子を受け入れてくれない現実がありました。特に、息子の学年の近所の男の子は、みんな野球かサッカーを習っていて、親が、

「男の子だし、どっちかはさせたいもんなあ。」などと言っていて、息子がどちらもしたがらない私を可哀相だと言い、私の気持ちも、ただの強がりのようにしか受けとめてもらえませんでした。そして、娘や息子から、息子は友達の家遊びに誘いに行き、何度も玄関先で断られていた事を聞き、強いショックを受けました。

そんな息子も、校区内の少し離れた友達の家の方まで遊びに行けるようになり、気の合う友達と穏やかに遊んでいます。これから先も、辛い思いをする事があると思いますが、強い気持ちで好きな事に取り組んで欲しいです。そして、子ども達には、一人一人の個性を尊重して、違いを認め合える人に成長して欲しいと思います。そのために、一緒に課題図書を読んで人権について考えたり、積極的に子どもと関わっていききたいと思います。

選考にあたって

このたび「第三十七回わたしからの人権メッセージ」にご応募いただいたみなさん、どうもありがとうございます。また、特選を受賞された二十名のみなさん、入選を受賞された三十名のみなさん、おめでとうございます。

今年度は、一千八百二十八点にも及ぶ多くの作品が寄せられました。このうち小学生が二千九十七点、中学生が五百九十五点、高校生が二十八点、成人が百八点でした。この取り組みが広がっていることをうれしく思います。

選考では、一次審査で二千八百を超える作品を五十点に絞り込み、さらにその中から二十点の特選作品を選出いたしました。

審査にあたっては、さまざまな体験や知り得たことを自分自身の問題として捉えられているか、差別をなくすためにどのように行動しようとしているか、またその作品が広く市民の人権意識向上につながるものであるかを、大切なポイントといたしました。

今年も、小学生、中学生をはじめ、さまざまな年齢層の方から応募をいただきました。中でも、小学生と高校生、成人からの応募が増加したことが今回の特徴です。テーマ別では、障がい者をテーマとする作品が多数寄せられました。障がい者施設での殺傷事件や四月一日から「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」がスタートしたことも影響しているのではないかと思います。また、子どもの人権をテーマとする作品の中では、いじめを見ていただけの自分を反省し、これからは積極的に声をかけていくという決意を述べたものがありました。平和をテーマにした作品の中には、けんかはいけないという大人が、なぜ戦争をするのかわからないという素朴な疑問を投げかけている小学生の作品があり、平和な社会を築くべき大人への強いメッセージになつていのように感じました。

このように、どの作品からも、差別のない平和な社会をつくりたいという思いや願いが伝わってきます。応募された方の真摯な姿勢には強く心を打たれるものがありました。

「わたしからの人権メッセージ」を契機として、すべての人が人権問題を自分自身のこととして捉えて行動し、堺から人権文化の花が咲き、人権尊重の輪が家庭、学校、職場そして地域社会へと広がっていくことを願っております。

審査員長 山口典子

(堺市人権教育推進協議会 副会長)

ご応募いただいた学校その他団体名

市小学校 英彰小学校 榎小学校 ☆鳳小学校 ☆鳳南小学校
 金岡南小学校 ☆神石小学校 ☆北八下小学校 ☆錦西小学校 ☆五箇荘東小学校
 泉北高倉小学校 大仙小学校 大仙西小学校 竹城台東小学校 登美丘東小学校
 西陶器小学校 上神谷小学校 ☆野田小学校 土師小学校 はつしば学園小学校
 八田荘小学校 ☆八田荘西小学校 ☆浜寺小学校 ☆浜寺東小学校 原山台小学校
 原山台東小学校 ☆東浅香山小学校 東百舌鳥小学校 平岡小学校 福泉上小学校
 榎塚台小学校 美木多小学校 三国丘小学校 美原北小学校 ☆三原台小学校
 美原西小学校 向丘小学校 百舌鳥小学校 八下西小学校
 ☆赤坂台中学校 浅香山中学校 旭中学校 ☆泉ヶ丘東中学校 ☆上野芝中学校
 大泉中学校 ☆鳳中学校 ☆金岡北中学校 金岡南中学校 津久野中学校
 ☆殿馬場中学校夜間学級 原山台中学校 晴美台中学校 日置荘中学校 平井中学校
 深井中学校 ☆深井中央中学校 美木多中学校 三国丘中学校 ☆南八下中学校
 陵西中学校 陵南中学校 若松台中学校

だいせん聴覚高等 堺東高等学校
 支援学校

☆(株)クボタ堺製造所 堺自由の泉大学 堺識字・多文化
 共生学級「つどい」

※五年以上連続で応募があった学校や団体には、☆印をつけています。
 ご協力ありがとうございました。

(五十音順)

審査員
 大井田 信貴子 (堺市人権教育推進協議会常任幹事)
 加藤 勝徳 (堺市人権教育研究会研究部長)
 笹谷 恭祥 (大阪法務局堺支局総務課長)
 佐野 勝久 (堺公共職業安定所管理部長)
 瀧口 住子 (堺市教育委員会女性センター館長)
 中山 真裕美 (堺市総務局人事部人材開発課長)
 福井 宏尚 (堺労働基準監督署副署長)
 美濃部 桂子 (堺市人権教育推進協議会常任幹事)
 山口 典子 (堺市人権教育推進協議会副会長)
 吉田 真知子 (堺市教育委員会生徒指導課指導主事)

^ 敬称略・五十音順 ^

第37回わたしからの人権メッセージ 特選作品集

2016年12月発行
 編集・発行 堺市人権教育推進協議会
 〒590-0078 堺市堺区南瓦町3番1号
 堺市市民人権局 人権推進課内
 電話 072-228-7420
 FAX 072-228-8070

私たちのまち堺から
人権文化の  を咲かせよう

この作品集は、「第 37 回わたしからの人権
メッセージ」に応募された 1,828 点の作品
のうち、特選作品 20 点を掲載したものです。

